



# 2021年度 外部評価実施概要

---

## ■実施日時

2021年6月17日(木) 15:30-17:00

## ■評価専門部会委員

生和 秀敏氏(大学基準協会特別研究員、広島大学名誉教授)

吉武 博通氏(情報・システム研究機構監事、東京家政学院理事長)

渡会 修氏(行政管理研究センター理事長)

## ■外部評価実施サイクル

1年目:内部質保証システム及びTotal Reviewの適切性

2年目:総合的なマネジメントに向けた取り組みの適切性

3年目:中期総合経営計画における実施計画・基盤計画

の取り組みとその進捗状況の適切性について



# 2021年度の外部評価の主な観点

---

- 1) 関西学院の中期総合経営計画の枠組みの適切性
- 2) KGC2039と中期総合経営計画に関する  
内部質保証の仕組みの適切性
- 3) 中期総合経営計画におけるTotal Reviewの適切性
- 4) 各学部/研究科の中期計画と内部質保証  
の仕組みの適切性



# 委員からの総評

☑ 経営と教学が一体となり、且つ中期総合経営計画と内部質保証を連動させてPDCAサイクルを回そうとする挑戦に心から敬意を表したい。また、経営資源配分と連動させた「学部教育改革施策」で学部/研究科に参画を促す仕組みが素晴らしい。その上で、仕組みがしっかりすればするほど瑞々しい感性や活力がなくなっていくことに注意すべき。加えて、教職協働の在り方を考えてほしい。私学のトップ校として、大学院教育含めて研究力をもう一段志の高いところに引き上げていただくことを期待したい。

☑ 中長期ビジョンを基に、時間軸も長く、大学だけでなく学院全体を捉えた、網羅的かつ詳細な計画を作っていることに感嘆した。逆にこれだけ大きな計画だからこそ、各現場の方々の評価作業を自分のものとする自律的なPDCAが回っていくような努力をしていただきたい。

☑ よくぞここまで構造化した。KGI・KPIを用いることで具体化し、そのことで計画の全体像、活動の目標が明確になっている。これを各部局や構成員一人ひとりが理解し、どう参画・関与する必要があるかを理解できるとよい。全体を通して「流石関学、ここまでよく組み上げた」と思う。普通の大学ではここまではいかない。敬意を表したい。



# 論点1：長期戦略のテーマ設定

---

- ☑ 「研究」をもっと前面に出した方がいい。DXにも関連するが、オープンサイエンスの流れ、大学間連携において大きな変化が起きている。高い研究力は結果として教育につながる。
- ☑ 国際化の流れの中で、優秀な留学生は、どういう教員が、どういう研究をしていて、研究を通じた社会とのつながりなどを見ている。国際化を推進している大学であればあるほど研究力を高める必要がある。
- ☑ 各教員、各学部・研究科の関与度を高めるためにも、研究力の向上をミッションとしているというメッセージが必要。研究に関してのコミットメントが高い教員にとって、あまり関係ない取組になってしまう。
- ☑ 中期計画の内容をさらに豊かにするためにも、実効性担保の観点でも、研究者であり、教育活動を担う教員の中から、多様な視点に基づく課題提起や新たな発想を引き出しながら、より高いレベルでの教職協働を実現していく必要がある。



## 論点2:KGI・KPI

---

☑研究に関する指標、特に学部・研究科の独自指標の検討を活性化させ、コミュニケーションツールとしても活用していく必要がある。

☑客観的な数値で成果を確認することは重要。但し、指標は絶対ではない。数値化が目的化する問題も孕んでいる。よい指標を常に探究し、必要に応じて変更する柔軟な取組が必要。

☑世間は“KPIブーム”。無理やり数値化しても問題の本質が見えないことがある。数値化、可視化はやるべきだが、形式知は氷山の一角に過ぎず、圧倒的に多い暗黙知を形式知化する努力が大切。

☑前ICU学長が「もう一度大学に入学するとしてもICUを選ぶか」という学生の主観的な反応を大切にしていると聞いたことがある。我々は客観的な指標を重視し、主観的なデータや印象を軽視しがちだが、この中に含まれている様々な要因が合成された結果なので、その中でもキラリと光る何かを見抜く能力を磨く必要がある。



## 論点3:PDCAの実質化、Total Review

---

☑評価疲れが言われているが、現場の学部／研究科がなぜ評価をするのかをよく理解しないまま評価シートを埋める作業だけに没頭するようなことにならないように、現場の遣り甲斐を引き出す工夫をしていただきたい。

☑レビューに関する基本的な流れは問題ないが、一点学生評価が入っていないことが気になっている。これをどのように組み込んでいくか。多角的な評価がTotal Reviewであり、大学評価以外にステークホルダーの評価を加えると全体的な評価になる。とりわけ、学生がこの一連の流れを理解し、この評価に関与できるようになってくると取組が変わってくる。



## 論点4:各学部/研究科のPDCAサイクル

☑学部現場の若手・中堅教員とのコミュニケーションの機会を積極的に設けることで、お互いに問題点や具体的な課題を見つけることができるのではないか。

☑形式的な会議では本質的、構造的な問題が浮かび上がらない。如何に参加者の本音を、豊かな議論を引き出すか。現場と一対一でトッピングすることで現場の悩みや課題を率直に語ってもらうなどの取組の工夫も必要。

☑取組全体は極めて進んでいるが、一方で学部という閉じた組織が将来どれほどの通用性を持つかが気になる。日本では中々定着しにくいのは承知しているが、海外では学生はどのメジャーを学んだかは言うがどの学部を卒業したかはあまり言わない。従来の学部・学科制度をもっと柔軟な、他領域と複合的な新しいものを目指していけるよう組織体制の在り方を考えていくことが必要ではないか。



# 外部評価を踏まえたNext Action

---

- ☑**学長（企画担当理事）**は、学部/研究科等とのコミュニケーションの機会・場の設定に対して一層工夫・努力する。
- ☑**総合企画部**は、研究に関する長期戦略の更なる推進のため、実施計画及びKPI（指標）の設定/見直しを改めて検討する。
- ☑**総合企画部**は、現場とのコミュニケーションを活性化させるため、KGI・KPI含めたデータの活用、分析・リポーティング機能を強化するよう努力する。また、学生による評価を一連のサイクルにどう取り込むかを検討する。